

安野発電所への中国人強制連行

和解を導いた力 Part 3

西松建設裁判原告・宋継堯さんの闘いをふりかえる

日時：2023年10月14日(土)14:00～16:30

会場：広島弁護士会館 3階ホール（広島市中区上八丁堀 2-73）

参加費：500円

主催：広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会



トロッコ事故で両目を失明した宋継堯さん
(1997年9月、山東省萊陽市の自宅)

アジア・太平洋戦争の末期、労働力不足を補うために、東条英機内閣が閣議決定して、中国から約4万人の中国人を強制連行し、全国135か所の事業場で重労働に従事させました。その結果、約7,000人が日本で命を落としました。生き残った中国人は、日本敗戦後、何の補償も受けることなく集団で帰国しました。広島では、西松組（現在の西松建設）が360人を安野発電所の建設工事に従事させ、29人が死亡（うち5人は原爆死）し、331人が帰国しました。

安野へ強制連行された中国人のその後の消息は長く明らかになっていませんでしたが、1992年から広島市民と河北大学による日中共同調査が始まりました。93年に被害者2人が半世紀ぶりに来日し、西松建設に対して3項目要求（公式謝罪、追悼碑と記念館建設、しかるべき賠償）を提出して補償交渉を開始しました。しかし西松建設が責任を認めなかったため、5人が原告となって西松建設を広島地裁に提訴しました。

宋継堯さんは、失明の無念をはらし、正義と公道を取り戻すために原告として裁判を闘いましたが、2007年4月、最高裁で敗訴しました。

「1945年3月、石を積んだトロッコを押して外に出たときの事です。トンネルの出口から30～40m出たところが右回りの下り坂でした。カーブでブレーキが効かず、トロッコが脱線して転落しました。私はトロッコもろとも崖下に投げ出され、顔は血だらけになり、目に砂がいっぱい入りました。

両目が腫れて熱も出ました。特に右目の痛みが激しく、私は両手で右の眼球を押さえて、しぼり出すようにしてつぶしました。血と膿がたくさん出て、痛みが軽くなりました。治療を受けていたら、失明しなかったはずです」

最高裁敗訴後、2009年10月に西松建設との間で和解が成立しました。翌年、「安野 中国人受難之碑」が建立されましたが、宋継堯さんは待ち望んだ記念碑を見ることなく2010年1月に82歳で亡くなりました。

本集会では、宋継堯さんの人生の晩年をかけた闘いの軌跡を、映像や証言を交えながら、さまざまな角度からふりかえります。

<プログラム>

第1部 ニュース映像で見る宋継堯さん

第2部 宋継堯さんを語る

陳輝さん（山東省青島市）

足立修一さん（弁護士）

第2部では2人の方から宋継堯さんをお話いただきます。陳輝さんは1999年から通訳として支援活動に参加し、宋継堯さんに付き添うなど6回来日しました。また香港行動にも宋さんとともに参加しています。陳輝さんには自宅と会場をリモートでつないで、お話を聞く予定です。

足立修一さんは弁護士として1992年から交渉・裁判・和解の全過程に関与してきました。

ふるってご参加ください。

宋継堯さんの軌跡



50年ぶりに来日、右は三男・宋健剛さん
(1995年5月、広島駅)



神村小学校で子どもたちに体験を語る (1995年5月、福山市)



安野受難労工聯誼会結成に参加 (前列右端)
(1995年8月、河北省保定市)



失明した事故現場でトラック転覆の経緯を説明する
(1999年2月、安芸太田町香草)



控訴審第1回口頭弁論直前の記者会見で発言する。
左から新美隆弁護士団長、通訳・陳輝さん、右端は何俊仁
香港立法会議員 (2003年2月、広島弁護士会館)



香港の支援者とともに街頭で
西松建設香港支店に対し抗議
活動を行なう
(2001年12月、香港)



最高裁不当判決を受けて
問題解決まで闘う決意を
亡くなった仲間に報告。
右端は陳輝さん。
最後の来日となった
(2007年4月、安芸太田町)



【連絡先】 広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会

《電話》 080-3880-8340 《Eメール》 ykkwhr@pony.ocn.ne.jp 《ホームページ》 <https://keishousurukai.com/>